キユウ妖怪相談事務所

銀風　鈴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キユウ妖怪相談事務所

【Ｎコード】
Ｎ２６９７Ｄ

【作者名】
銀風　鈴香

【あらすじ】
正直言って、あんまり日常を楽しく思っていない主人公、鈴香と謎の少女、キユウが出会う――――。キユウはいったいどんな女の子なのか？二人はどうなっていくのでしょう。

プロローグ

それは、忘れ去られた空き地にあった。
周りは草木が伸び放題になっており、空き地を足早に過ぎていく人たちは、草木に隠れたそれに気づかない。

いや、気づこうとしないのだ。

無意識にそれに関わりたくないと思って気づかない。
もし、あなたに、それをまっすぐ受け入れられる心があるのならば、開けてみて。ドアを。

この、忘れ去られた場所にあるドアを。あなたが必要とすれば、きっと道は見えてくる。
そのドアの向こうには、真実が待っている。

さぁ、自分の手で開こう。

その日は、いつもと変わりなかった。
いつもどうり起きて、ご飯を食べて、顔を洗う。

私は、鏡に写っている自分を見た。
いつもと変わらなく、真っ黒な髪、同じく真っ黒な瞳、ちょっと上向きな鼻、むっとしたような口元、真っ白な肌。
いつものように、ちょっと長めの髪をポニーテールにむすんだ。
ランドセルを持って、学校に行く。
教室に着くと、いつも通りに、友達の高橋　歩が寄ってきた。
「おはよう。」
――――――おはよう。
いつも通りの挨拶、いつも通りの学校、変わらない風景。
人は、変わらないこと、何も起きないこと、異常なことが起きなければいいと言う。

それが、『幸せ』なんだと。

でも私はそう思わない。

人は変わるものだから。
毎日変わらない、それじゃ、人なんかじゃない。ただの、命令されたとおりに動くロボットだ。
私はそれがいやだ。
少しでも、いつもと違うことが起きてほしい。
そしたら、このつまらない日常から、ぬけだせるかもしれないから。

「鈴香ぁ～～～～～。最・新・情・報・だよぉ～～～～・」
いつも通り、テンションの高い歩。
あ。いいわすれたけど私の名前は、

朝比奈　鈴香　（あさひな　すずか）十二歳。小学六年生。
「聞きたい？聞きたいでしょ？」
私の机に両手をのっけてる。あぁ。歩が犬のようにしっぽを振っているように見える。
ついでにいっておく。このうるさい奴は、
佐藤　歩　（さとう　あゆみ）　十二歳。小学六年生。
「うん・・・・・・。」
多少引き気味に私が答えた。
「でしょぉ～！でしょでしょ！」
うわぁ～。喜んでるよ。目が輝いてる。
私ビジョンでは、歩がちぎれんばかりにしっぽを振っているようにしか見えん。
「な・ん・とぉ～～！このクラスに転校生がきまぅす！」
うわ～。なんでそんな先生ぐらいしか知らんようなことをあんたが知っているんだ・・・。
あ！いやっ！答えなくていいから！マジで！
しかし、歩は私の心の中の疑問に答えようとしたわけではなかった。
（そりゃそうだろうが・・・・。）
「それがさぁ～？男か女かわからないのよね～・・・・・。」
腕組をしながら溜息をつく、歩。
「べつにいいじゃん。わかんないほうがさ？」
「え～～？私はやっぱり男の子がいいよ！」
「なんで？」
ダーン！と歩が私の机をたたく。
「なーにいってんのさ！男の子だったら新たな恋・・・・・・ラブロマンスの始まりじゃないのっ！」
両手を握り締めてどっかにいっちゃってる歩。
「・・・・・・。」
私はおとめ座だが、恋だとか、そーゆーのに興味ナシ！実は初恋もまだだったりするんだよね・・・・。ハハハ。

そうそう。歩はふたご座！
『好奇心旺盛で情報に目がない。』
大当たり～～～！
占いの本を読んだときあたりすぎてて、感動したよ。
そんなことを考えてる間に先生が入ってきた。
「ほらー。お前らちゅーもーくっ！」
担任の渡辺先生が叫んだ。
おっと。ここでこの先生の紹介をしておこう。
渡辺　沙織（女）二四歳。独身。
犬歯が長く、虎をイメージさせる。なんというか、男より、女にもてるタイプ（だろうと私は見ている）。
「今日は、重要なお知らせがありまーす。なんと、この六年一組に転校生がきました～。」
この言葉に、私と歩以外の生徒がざわめく。
「ハーイ。しずかに！じゃ、どーぞ！」
先生のその言葉で、六年一組のドアが開く。
ガラガラ。
そこに現れたのは、女の子だった。
髪型はショートカットで、ちょっと、茶色っぽい色。七分丈のジーンズをはいていて、黒のパーカー、前が開いてて、その中も黒。
顔は、うーん。正直いうとカワイイ。整った顔立ちってやつだ。
でも、なんだか、この子をみて私は背中に寒気が走った。

『なにかがおこる。』

そう直感した。
「奇津根　キユウ（きつね　きゆう）です。よろしく。」
変な名前。「奇」っておかしくない？
「よし。奇津根。お前は、一番後ろの席だ。じゃ、みんななかよくしてやれよ～」

転校生は、私の横をと通りすぎていった。

『一人・・・。少ないな。』

え？

私は後ろを振り返った。

今・・・。転校生がしゃべったの・・・・？

なんだか頭の中で響いてくるような感じだった・・・・。

「はい！じゃ～授業始めるぞ～。」

これが、私とキユウの出会いだった。

そして、あのドアを開けることになったきっかけ――――。

――――いつも通りの挨拶、いつも通りの学校、変わらない風景。

私は、自然と口元がゆるんでくるのを感じた。

『なんだやっぱりかわるじゃないか。』

プロローグ（後書き）

ども。鈴香です。
小説は初挑戦ですっ！変な内容になっていないか不安です・・・。
変なところがあったら、教えてくださるとありがたいです・・・。
なるべく早く次の話し書こうと思ってますが、気長にまっていてくれるとありがたいです。

第1話　始まり

「ねぇ。キユウちゃん。引っ越してくる前はどこに住んでたの？」
「東京。」
「キユウちゃんって誕生日いつ？」
「四月九日。」
「キユウちゃん。星座は何？」
「おひつじ座。」
女子たちの質問攻めに動じることなく、淡々と答えている。
そして、定番のアレがきた。

『ねぇ。キユウちゃん。うちの鈴蘭学校の事よく知らないだろうから、案内するよ？』

「あぁ～～。きぃ～～たぁ～～～～。」
耳元で言われてビクッとした。
「なっなに！？歩！？」
後ろには、歩がいたのだ。
「いーなぁー。私も案内したいなぁ・・・。」
・・・。歩は、どうせ情報目当てだろう。
「そうだなぁ・・・。じゃ、私あの人にお願いする。」
そしてキユウは指をさした。
「え・・・？」
キユウは、私を、指さしていた。
「い～なぁ～。鈴香ぁ～。私も案内したかったぞっ！」
能天気な歩・・・。

なっ、なんで私なんだよぅ～～～～！！？？

「えっとー。ここが図書室――――――。」
かなり大きいうちの学校の図書室を指さしてキユウの方を向いた。
「ふ～ん。」
キユウはあいかわらずぼけーっとして・・・・いやっ、何を考えているのか分からない顔をしている。
「で、このとなりが、音楽室。」
キラリ。とキユウの目が光ったような気がした。
「ちょっと中見せて。」
キユウはスタスタと歩いていって、音楽室の中に入っていった。
「えっ！？あっちょっと待ってよ！」
私は追いかけて、音楽室の中に入った。
その瞬間――――――――――。
私の背中に鳥肌が立った。
何か、異世界に入り込んだのかのような違和感――――――。
「ふ～ん。このグランドピアノ、いつからここにあるの？」
え？グランドピアノ？
「えっと、たしか去年だよ。うん。」
たしか、卒業生からの寄付だとか何とか。
「そう。去年ね。じゃ、次いこ。」
そっから先の案内は大体さっきと同じ。

一体なに考えてんだか・・・・。

そして、次の休み時間――――――。

「っいう感じかな～～？ま、特に特別なことはなかったけどね～～。アハハ。」
私は自分の机に座りながら歩に語って聞かせた。
「何いってんのあんたぁ！最高のミステリーじゃないのっ！」
おいおい！なぜ今の話から、ミステリーになるんだっ！？どうゆう解釈のしかただよ！？
「そうよ！その話面白いわ！」
「うん。」
「はーい！私もそう思いまーすっ！」
ガッと歩の肩をつかみながら現れたのは、緩奈だ。
その後ろには、蘭と粋奈がいる。

さてと、ここでこの３バカトリオを紹介しておこう。
まず歩の肩をつかみながら現れたのは、
綾川　緩奈　（あやかわ　かんな）十二歳。小学六年生。
性格は、自己中心的。（かなり、的確な表現だと私は思う。）
そして、後ろにいる片方の
幸田　蘭　（こうだ　らん）十一歳。小学六年生。
無口なほうで、表情は大体いつも、仏頂面。（仏頂面なのにすごいことといったりするから、かなり驚かせられる。）
で、もう片方は
幸田　粋奈　（こうだ　すいな）十歳。小学四年生。
いつも歩並みに元気いっぱいの蘭の妹。（なぜか知らんがいつも休み時間になると六年一組の教室にくる。まったく、友達、いないの

か・・・？）
「なにが面白いって・・・？」
歩の時以上に引いている私が言った。
「さっきの話よ！音楽室に入った瞬間に感じた寒気・・・。最高っ！」
何が！どこが最高だ！完全にホラーだろ！？
「そういえば・・・鈴香、霊感あるよね・・・。」
と蘭。
うっ。それは否定できないが・・・。
「だよね～～。前も何か視たっていってたよね！鈴香っち。」
だから、四年のくせに『鈴香っち』とか呼ぶなっ！（っていうか一番お前が友達の中でなれなれしい！）
「そうよ！そうゆうあんたが寒気がしたってんだからこの学校の音楽室にはなんかいるに違いないわっ！」
なぜかガッツポーズをして、緩奈。
「なっ、何をたくらんでるんだ！何を！」
ゆういつのツッコミの私がツッコミを入れた。（この無駄にテンションの高いグループの中に私1人ってキツイだろ・・・。無駄に疲れる・・・。）
「ねぇ、歩、蘭、粋奈・・・、こーゆー事なんだけど・・・・ごにょごにょ・・・。」
緩奈が私以外に、耳打ちする。（ムカツク・・・。）
「おぉ～。」
「なるほど！」
「い～ね～。楽しそう。」
が、みんなの感想。上から蘭、粋奈、歩の順番だ。
「でしょ～。ってことで鈴香。」
緩奈がニヤニヤしながら、私のほうを向いて、恐ろしいことを言った。
「今夜、この鈴蘭学校できもだめしをしまぁ～す！」

はぁ〜！？

第1話　始まり（後書き）

ども～、銀風です。
私の小説に付き合っていただいて、ありがとうございます！
できれば、明日も更新しようかなぁ～と思ってるんで、物好きな方、
見てってくださいっ！

第2話　きもだめし

「なんでだよっ！？なんでいきなりきもだめしっ！？」
私のその言葉に気持ち悪い笑みをさらにひろげた緩奈。
「なに～？鈴香、この鈴蘭学校の七不思議、しらないのぉ～？」
気持ち悪い笑みの顔の緩奈がガッと近づいてきた。
「ひぃ！」
つい、引きつった顔で変な声を上げてしまった。
そんなことはお構いなしに緩奈は続けた。
「その七不思議の中には、『音楽室のグランドピアノで午前二時に「エリーゼのために」をを弾くとそのピアノに食べられちゃう』ってのがあんのよ～？」
「そ、それで、その話がさっきのとどう関係があんのさ！？」
「にゃはは～。そんなの・・・」
全員気持ち悪い笑みになってこう続けた。

『面白いからに決まってるじゃん！』

やっぱりか・・・。やっぱりそうなんだぁ～・・・。まぁ、それしかないよね～。いや、唯一のツッコミは疲れるわ～。アハハ。
――――――――というか、ツッコんでも、いいですか？
「てか、なんで私がきもだめしについていかなきゃならんのだ！お前らだけで行け！」
一瞬、あきらめた表情をしたものの、一応反論してみる。
その言葉に対して歩は、
「やっだなぁ～。霊感のない私達だけで行ってもたいした情報仕入れられないし～？それに、やっぱり面白くないじゃ～ん？」

と、そう言った。
私に同意を求めるな！なんだ？面白くないってのは！？私のリアクションが見たいだけじゃないのかっ！？そうなのか！？そうなんですか！？
「それに・・・。「エリーゼのために」弾けるの、鈴香だけだし。」
と蘭。
うぐぐっ。否定できない。幼稚園の頃あたりに無理矢理ピアノを習わされたのだが、今でも弾けるかどうか。
「だっね～。ってことで鈴香っち。きもだめし行く事、決定だね♪」
ポン、と粋奈が私の肩をたたく。

マジですか？

どうやら、マジみたいです。
迷惑な話だが、私がきもだめしに行くことは決まったらしい。
私は今、学校へと向かっている。夜の学校に。

『鈴香！今日の夜十一時、学校の門に集合ねっ！来なかったら、明日地獄行きだから覚悟しておきなさい！』

そんなこと言われたら行くしかあるまい。
っていうか、緩奈ならマジでやりかねない。（実際に、緩奈の兄が半殺しにされているところを見てしまった事があるから余計にリアリティがあって恐ろしい・・・。）
ということを考えているあいだに集合場所に到着～。
「にゃっ！鈴香っち～。遅いぞっ！」
「うん・・・。遅い」
門にいたのは幸田シスターズ。
「あんた達が早すぎるんだよ。はりきりすぎ。」
今はまだ、七時三十分だ。
「鈴香こそ早くきてんじゃ～ん。ヒトのこと言えないでしょ～？」
と、粋奈が言った。
「いや、私はそういうんで早く来たんじゃないの。まったく・・・。だって、早く来ないと、ば・・・・」
私の言葉は途中で途切れた。
なぜなら・・・。
「やっほっ～～～！！来たかっ～？鈴香っ！」
ビシッと手をあげながらこっちに来たのは緩奈。
「おっ！歩来てないじゃん。じゃ、罰金決定だね～。」
罰金とは何か？
それは、緩奈は、いっつも人のことを待たせるくせに、人のことを待つのが嫌いなのだ。
だから勝手に「罰金制度」ってのを作って、待ち合わせで、一番遅く来た人が、全員に何かおごる、ってことになっている。（とかいっときながら、自分が一番遅く来たときはあやふやにして払わないんだよね・・・。まったく、理不尽なんだよ・・・。）
「そっか・・・。「罰金制度」があったね・・・。たしか鈴香っちはもう四、五回くらいこれの餌食になってたね・・・。」
ゴニョゴニョと蘭が耳打ちしてきた。
そうなんですよぅ。この理不尽な制度で私はもうすでに、一万円近

くを支払ってる。（本当にきついんだよ。みんな罰金払わないようにかなり早く来るから、それより早く来るのはかなりね・・・。はぁ・・・。）
「ふぇ～～～！後れてゴメーン！」
走りながらこっちに来たのは、歩。
「おっそーい！！罰金！」
緩奈は、歩に指を突きつけた。
って、おいおい。あんたもさっき来たばっかだろうが。
「うぅぅ。今まだ八時五分なのにぃ～。」
まぁそうだが。でも私も罰金はいやだからね。アハハ。すまんな歩、犠牲になってもらって。
「さて、いきますか。」
そう言ったのは、蘭。
「そだね。行こう！情報集め・・・じゃなくてきもだめしに！」
はいはい。きもだめしという名の情報収集でしょう。歩にとっては。
「さぁ～て！夜の学校に忍び込むぞぉ～～！」

不法侵入は、したくないなぁ・・・。

とかい言っときながら、この人たちについて行く、私も私だが・・・・。

第2話　きもだめし（後書き）

ども。銀風です。
一日遅れてしまって、本当にすいませんっ！
今度は、遅れないように気をつけます・・・。
できたら、明日更新できたらなぁ～と思っています・・・。
でわ、また次の回で～。

第3話　考えなしな提案者

「って、きもだめしって言いだしたの、緩奈だよね～？」
とりあえず、確認をとっておこう。
「うん・・・。そうだよ・・・？」
ピクッと私のこめかみに青筋が立った。
「だよね～。じゃあなんで、学校に入る前に、ちゃんと前準備しなかったのさ？」
その言葉に緩奈はハハッと笑って、

『そんなの、私がやると思う？』

緩奈は軽い調子でそう言った。

アッハッハ。思いませんよ。そんなこと。ただ、なんでこんなにも私たちの運が悪いのかなぁ、と思いまして。

――――――なんでこんな、夜の学校にこんなにたくさん人がいるのかと思いまして。

「あぁ～。そういえば、今日、不審者対策強化デーだったねー」
と淡々と言う蘭。
いや、いくらなんでもやりすぎだと思いますが・・・。っていうか、普通懐中電灯持って見回るのは学校の中じゃなくて、外だと思うんですが・・・？

私の目の前に広がっている光景はすごかった。（と私は思う。）
何十人ものお母さん方、お父さん方が懐中電灯を持って学校中を歩き回っていた。
その何人かには先生達も混ざっている。

「ニャハハ。今日はおためしみたいな感じで学校の中だけでやるっていう企画なんだよぅ～。だから今、この学校は完全に入れない要塞となっているわけだよ～ん。鈴香っち。」
と、ムカツク言い方をする粋奈。（ものすごいムカツク！）
「後何分くらいで終わるのさ？」
と聞いたのは、歩。
「そだな・・・。あと何十時間くらいかなぁ・・・。」
二桁突入しちゃってるし・・・。それじゃあもう朝じゃん。
「じゃあどうするの～？鈴香っち～なんかいい案無いの～？」
なんで私に聞くっ！

「まぁ、ないことはないけど・・・？」

「えっ！？うそ！どんなの～？教えて～」
「そんな案があるなら、さっさと教えなさい！」
「鈴香・・・。本当に案あるの・・・？」

――――――はぁ、これはみんなの反感を買うだろうから使いたくない作戦だったんだけど・・・。しかたないか・・・。
まぁ、こうゆう作戦を考えてきたのは、私達が超運が悪いって事と、

この人達にちょっとした復讐をしてっやろうかなぁ～っていうのが本音ですけどね・・・。

ちょっと、罪の意識があるが、ここまでこいつらにされてきたことを考えると、こんくらいの復讐があってもいいだろうという気になる。

「じゃあ、まず・・・。」

私達の、長い夜が始まった――――――。

第3話　考えなしな提案者（後書き）

ども。銀風です。
またまた、遅くなってすいません・・・。
なかなか、時間が無くて・・・。（言い訳ですけど・・・。）
なにぶん、学生ですので、最近テスト多いですね～。（うちの学校だけかなぁ～？）

次は、遅くなると思いますが、ご了承ください。

第４話　鳥作戦！！

「名づけて、鳥作戦！！」
ビシッ！と人差し指を突きつけて私は言った。
「おぉ！なんかすごい名前だ！」
「鳥のように美しく！ってこと？かっこいいじゃない！」
「・・・。」

私の考えた作戦にはピッタリの名前だ。
緩奈たちには、作戦の内容を全部言っていない。（言ったら、緩奈に殺されそうだから・・・。）
まぁ、後々説明するからって言ってあるんだけど。

「よし。じゃあ、二手に分かれよう。そだな、じゃ、歩と粋奈と緩奈チームと、私、蘭チームで。」
勝手に決めるが、あちら側に依存は無いらしい。
「おっけー。じゃ、私達、あそこの門登るから。」
緩奈が指差したのは、正面の門。
「じゃ、かんばってね～。」
バイバイ、と手を振る私。

緩奈たちには、正面から学校に侵入するって言ってある。
そこが盲点（もうてん）だ！って私が言ったから。

「鈴香。・・・・ホントの作戦、聞かせて？」
蘭は、私に言った。
「にゃは。やっぱ気づいてたよね～。あのバカな3人なら簡単に騙(だま)せるけど、やっぱ、蘭はあんな作戦でいけると思わないよねぇ～。」
軽く、私は蘭に言った。
はぁ、と蘭は溜息(ためいき)をついた。
「普通に見つかるでしょ。あんなの。」
「ふふふ。でしょう。蘭はラッキーだねぇ～。さて、こっちこっち。」
私は手招きをして、正面の門にまで行く。
「何？」
「面白いものが見れると思うよぉ～。確か、緩奈のお母さん、来てるよね？」
こそこそと、門の近くの茂みに隠れる私達。

『この、馬鹿娘ぇ～～！！！』

ガン！！

女の人の大声と、かなり大きい打撃音が聞こえた。

蘭は隣で驚いた顔をしている。

「なっ！？お、お母さん！？何でこんなとこに？」
ここからでも、緩奈の声が聞こえる。

おそらく殴られたのだろう。痛そうな声。（というか、泣きそう？）

「何でも何も無いでしょ！！見回りに決まってるじゃない！！まったく、この馬鹿！！夜に歩きまわって！！」

大きな声――――おそらく緩奈のお母さんの声――――が響き渡る。

「ふぇぇ・・・。・・・・鈴香の馬鹿ぁ・・・・。」

「嘘つきぃ～～・・・・。」

小さな、歩と粋奈の呟きが聞こえた。

「これって・・・・。」

蘭はつぶやいた。

「にゃは。ここで作戦の名前の意味、分かった？」

「『お』鳥作戦・・・。うまい。座布団一枚。」

蘭は無表情のまま、冗談を言った。

私はニッと笑って親指を立てた。

おとりに緩奈たちを使わせてもらいました。

いやぁ、すまんね緩奈君、歩君、粋奈君。

天罰だと思って、我慢してくれ。

「さて。おとり君ががんばってる間に、侵入しますかぁ～。」
茂みから立ち上がり、大きく伸びをした。

「あれ？嫌がってたのに、いくの？」
そんな蘭の問いに、私はこう答えた。

「なにか・・・いやな予感がする。何か起こる前に、止めなきゃいけないと思うから。ね？」

その答えを聞いて蘭は、笑った。

――――――変わらないね。鈴香は。

第４話　鳥作戦！！（後書き）

ども。銀風です。
読者数多くてびっくりしました・・・。
未熟者の小説を読んでくださって本当にありがとうございます！！
あと、誤字脱字ありましたら、教えてくださるとありがたいです・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2697d/

キユウ妖怪相談事務所

2010年10月28日04時12分発行